発達理論の学び舎

Back Number: Vol 141

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

2801. 日曜日の朝より

2802. クリシュナムルティの思想より

2803. フローニンゲンという街で生きて

2804. 文章の生成力及び自分自身から学ぶということ

2805. 鳥の気持ち・空の気持ち

2806. 部分と全体の詩

2807. 色鉛筆と日本のそば

2808. マラルメの詩集とシュタイナーの音楽理論

2809. 新たな週を迎えて

2810. テレマンの曲と生命のつながり

2811. 発達の「ユートピア的アトラクター」について

2812. 作曲技術の涵養に向けて

2813. オーロラとモネ

2814. 創造性の源と霊性

2815. スペインリーグへの出場と仮想通貨投資に関する夢

2816. 夢とシャドー

2817. 肌寒い早朝より

2818. 空白の時間と船旅への思い

2819. 音色を捉える心眼と魂の形成期について

2820. 論文との付き合いの継続

© YOHEI KATO 2018

2801. 日曜日の朝より

気がつけば七月に入ってからすでに一週間が過ぎていたが、至って過ごしやすい爽やかな気候が続いている。今日の最高気温は21度であり、最低気温は13度であるからとても快適な一日になるだろう。

時計の針が午前七時を指そうとしている。この時間帯のフローニンゲンの空は澄み渡っており、穏やかな朝日が街全体を照らしている。その光景は今日もまた充実した一日になるであろうことを静かに物語っている。

昨日はメシアンが作曲理論について解説した書籍“The Technique of My Musical Language (1956)”を読み終えた。本書にはとりわけメシアンの曲から抜粋された具体例が豊富に掲載されており、メシアンの楽譜を持っていない私にとってはメシアンの音楽を理解する上でとても参考になる。おそらくメシアンは現代音楽の括りに入る作曲家だと思うが、このカテゴリーの音楽をあまり積極的に聞いてこなったこともあり、これからは少しずつ音楽を鑑賞する範囲を拡張させていきたいと思う。

いずれにせよ、本書にはメシアンの作曲技術の全体を理解する上で非常に参考になるだろう。本書に関しても近々、詰将棋を解くような感覚で、本書の具体例を実際に楽譜上に再現する形でその理解を深めていきたい。

創造活動に適した早朝の時間帯はまず以前作った曲を編集し、その流れを受けて一曲ほど作曲をしたい。それが終われば過去の日記を少しばかり編集する。その後、先日購入した“Intervals, Scales, Tones, and the Concert Pitch c=128Hz (2004)”に取り掛かる。本書は、ルドルフ・シュタイナーの音楽理論から影響を受けた音楽家によって執筆されたものである。シュタイナーの音楽理論について大変強い関心を持ち、それについて調べている時に本書と偶然に出会った。

本書は直接的に作曲に役立つというよりも、本書に掲載されている豊富な科学データとシュタイナーの音楽理論に基づいた説明を読んでいくことによって、音楽そのものに対する理解が深まっていくことを期待している。本書を読み終えたら今度は、マラルメの詩集を少しずつ読み進めていく。これは先日ドイツの書店から届けられたものだ。

© YOHEI KATO 2018

午後から一件ほど知人の方とオンラインミーティングが入っているが、それ以外は探究活動と創造活動に時間を充てることができる。夕食後に、現在協働で執筆している書籍の原稿を再度レビューしたいと思う。昨夜、自分の担当箇所の執筆を終え、その箇所をもう一度読み返してみる。修正が必要であれば修正を施し、その後に原稿を協働執筆者の方に送り返す。

さざ波のような風が吹き始めた日曜日の朝。近くで小鳥の鳴く声が聞こえてくる。今日もよく学びよく作る日としたい。フローニンゲン:2018/7/8(日)07:21

2802. クリシュナムルティの思想より

日々が、そして人生が水のごとく流れていくのがわかる。古代ギリシャの哲学者タレスが残した「万物の根源は水である」という言葉がふと脳裏をよぎる。そんなことを思わせてくれる早朝だ。

今日もゆっくりと活動を開始し、なすべきことを着実に前に進めていきたいと思う。決して焦ることなく緩やかに物事を進めていく。それが真に深みに至るための唯一の道である。

昨日、この世界には白魔術と黒魔術が存在していて、実際には私たちの誰もがそれらの双方を日頃から知らず知らず活用していることについて考えていた。よくよく考えてみれば──考えてみなくても──これはあまりにも常識的すぎるかもしれない。というのも、現代社会には魔女狩りが横行しているのだから。この問題についてはまた形を変えて考えることになるだろう。その時に再度文章を書き留めておきたいと思う。

思いついたことがあれば何でもそれを書き留め、そのテーマが自己組織化を行うことを手助けしていく。一旦外側に文章として形にすれば、あとはそれは自発的に発達運動をし始める。それがテーマの成熟につながっていく。とにかく文章を書くということの意義はここにある。煮詰まってから文章を書くのでは遅すぎるし、考えがまとまってから文章を書くというのも遅すぎる。何もまとまっていないような状態から文章を書き続けていくことが何よりも大切だ。

昨日、クリシュナムルティの書籍を読んでいたことを昨日の日記に書き留めていたように思う。クリシュナムルティの思想には随分と得るものが多いことが昨日判明した。書籍の中でクリシュナムルティは、解放者の苦難について言及していたことが印象に残っている。

© YOHEI KATO 2018

真に何ものにも囚われず、真に自由な人間は社会や他者から危険視されるということ。それがまさに自由人がこの現代社会で被る苦しみだろう。そうした苦しみからも解放されているのが真の自由人なのだろうか。人間が時代の中で生きなければならないという性質上、何ものにも囚われないはずの自由人ですら時代からの影響をやはり受けるように思う。

ひとたび社会から解放された者が再び別種の苦難を社会から受けるということはとても皮肉なように思える。人は自由になっても、自由でなくても苦難を被る生き物なのかもしれない。

世間には自由であろうとする者が多々存在しているが、自由であろうとすることがそもそも自由ではないことの裏返しであり、そこに自由を求める独特の辛さがある。一方で、クリシュナムルティが指摘するように、真に自由な人間ですら、社会や他者から危険視されるという苦難を味わう。自由でなくても、自由であっても苦しい世界に私たちは生きているようだ。

開かれた書斎の窓から小鳥の小さな鳴き声が聞こえて来る。それは確かに小鳥の鳴き声なのだが、同時に、時代の呼び声のようにも聞こえて来る。時代の呼び声の本質を掴まなければならない。そこに上記の問題を乗り越えていく道があるように思えてくる。フローニンゲン:2018/7/8(日)07:42

2803. フローニンゲンという街で生きて

文章はやはり勢いに任せて書いていくのが良いかもしれない。文章には固有の鮮度があり、その鮮度が保たれている間に文章を書き出していくことが大切だ。書き留めておきたいことをメモしておくことは確かに有益だが、メモをする以上に、書きたいものが現れたのであればそれをある程度のまとまりを持って書き出してしまう方が良いように思えてくる。今日からは特にそれを意識して文章を書き進めていきたい。

メモとして残るのは一行程度だろうが、そのメモを実際に文章の形にしてみようと思うと、必ず何行にもわたって文章を書いていくことになるだろう。なぜなら、文章は常に自己組織化を行っている生き物であるからだ。一行書けば大抵の場合次の行が生まれる。自己組織化の運動がしかるべき場所に落ち着くまで文章を書き出しておくことは、文章の生成を助けるばかりか、自分の内側の生成運動を淀みないものにしてくれる。あるべきものはあるべき形であるべき場所まで辿り着く必要がある。文章の執筆に関しても全く同じである。

現在、作曲実践においては過去の偉大な作曲家に範を求めながらそれを進めている。彼らが残した楽譜がなければ、まだ全くもって曲を作れないような状況にある。つまり、まだ自分の内側から純粋に湧き上がるものだけを形にしていくことは難しく、参考とする曲によって喚起されたものを出発点にして作曲を開始し、さらには曲の構造に関しても彼らのものを参考にしている。

昨日ふと思ったのだが、創造の出発点には模倣が必ずあるが、そもそも模倣をするための技術というものをまずは養っていく必要があるかもしれない。もしかするとこれは以前にも言及したことがあるかもしれないが、創造活動を進めていく時に、模倣の時期は不可避に存在しており、それは型の習得の時期だと言い換えてもいいだろう。

型を型として学ぶための技術なるものが存在しており、それを見過ごす形でいくら模倣を試みたとしても何も身につかないのではないかという考えが浮かぶ。模倣するためにも技術が必要なのだ。それを少しずつ涵養していく時期に今の自分はある。毎回の作曲実践では特にその点について意識しようと思う。今日これから行う作曲実践はまさにそうした意識をもって取り組む格好の機会になる。

さざ波のような風が一旦休まり、再び波の運動が始まった。雲が一切なく、スカイブルーしか存在しない空。空が空と呼ばれる所以を体現する空が目の前に広がっている。数羽の鳥たちがその空を自由に舞っている。

先日、オランダ人の友人が興味深いことを述べていた。彼はフローニンゲン生まれのフローニンゲン育ちの人間であり、アムステルダムやハーグなどの都市で生活することは考えられないとのことである。

フローニンゲン大学に来てから何人かのオランダ人の友人ができたが、そのうち何名かはフローニンゲンで生まれ、フローニンゲンで育ったという経歴を持つ。彼らは一様にフローニンゲンから離れたくないようであり、中にはフローニンゲンでしか生活を営んだことのない者もいる。そういえばかかりつけの美容師のメルヴィンも同様だ。彼らの話に耳を傾けていると、その気持ちがわからないでもないということに気づいた。この街には何とも言えない魅力と落ち着きがある。何を隠そう、私もこの街で三年間過ごすことになったのである。

© YOHEI KATO 2018

存在を揺するさざ波の流れる街、フローニンゲン。存在を抱擁し、存在を育んでくれる街、フローニンゲン。今私はそのような街で日々生活を営んでいる。フローニンゲン：2018/7/8（日）08:05

No.1120: Glitter and Light

It started to rain just now. I was thinking about the glitter of raindrops and the light of this world. Groningen, 09:44, Monday, 8/13/2018

2804. 文章の生成力及び自分自身から学ぶということ

文章というのは本当に興味深く、一つ前の日記で述べていた通り、一度書き始めると文章が持つ自発的な生成力ゆえに、文章が落ち着くところまでそれが流れていくという特徴がある。単にメモ書きで済ませてはならないものがやはりあるらしい。メモをするぐらいなら、文章を書いてしまった方がいい。それが原稿用紙一枚ほどでも構わず、原稿用紙の半分であっても構わない。200文字というのは本当にすぐに埋まってしまう。それぐらいに私たちの内側には文字を生み出す生成力が備わっているのだ。

メモとして書き残したいことがあるならばいっその事文章として書き残しておくことをこれからの習慣にしようと思う。メモを書き残す際に感じていた一種の違和感、ある意味それは残尿感のようなものであり、その正体がはっきりわかったと言える。

内的感覚はそれが形を求めた瞬間に、あるべき形として形象化させる必要があるのだ。事実、文章として形になることを求める内的感覚をきちんと文章の形にしておくと、そうした残尿感は消える。それどこから、次の生成に向けて新たな運動を始めようとするのだから面白い。とにかく文章を書き続けていくことを自らに課す。

一見すると些細なことであっても、それが自らを捉えてやまないものであり、形になろうとしている限りはそれらも文章にしていく。文字と文字にならぬもので内面世界を満たしていく必要がある。全ては文字であり、全ては文字ではないものによって構成されているということを忘れてはならない。

ふと顔を見上げると、先ほどまで一切の雲がなかった空に一片の小さな雲が浮かんでいるのが見えた。まさしく今ここで行っているように、そうしたものを文章として書き留めておく必要があるのだ。

あの雲を見てみよう。ライトブルーの大海に一つだけ浮かぶその雲を見たときに何も感じないはずはないだろう。しかもそれはゆっくりと形を変えながら空を泳いでいるではないか。

自分はこれについて何も書き留めないほどに無感覚の人間ではないようだ。無感覚の人間でなければ、喚起されたものを文字として書き残しておくのだ。

赤レンガの家々の屋根にとまっていた数羽の黒い鳥たちが一斉に飛び立った。鳥が飛ぶのと文章を書くのは全く同じ行為である。「音」も「意味」も同じであるため、同音同義語とみなしていいだろう。

鳥たちの鳴き声に耳を澄ませていると、大地のダンスが聞こえてくるかのようだ。それはとても力強く、それでいて優しさがある。今書斎の中で鳴り響いているベートーヴェンのピアノ協奏曲以上に力強く、そしてそれ以上に美しいと言ってもいいかもしれない。

内的感覚が湧いた都度文章にしておくことの意義については、昨日読んでいたクリシュナムルティの考え方に通じるものがあるように思う。何かを思いつくたびに、そして何かを感じるたびに文章として書き留めておくのであるから、それは必然的に他の活動をそこで一旦休止させる。例えば私の場合、読みたい書物が目の前にあり、それを読み進めていく中で何か考えが湧き上がっても、読むことを優先させてしまう自分がこれまでいたように思う。だがこれについても改めなければならないだろう。

クリシュナムルティも述べているように、私たちは書物から学ぶのではないのだ。私たちは自分自身から学んでいくのだ。

仮に書物を読む場合であっても、書物から学ぶのではなく、書物を通じて喚起された自分自身から学ぶ必要がある。そのためには、喚起されたものを書き留めておくことがどれほど有益か。また、それをしないことがどれほど学びを劣化させることにつながることか。

自分自身から学ぶということ。それを強く意識して今日からの生活を送りたいと思う。フローニンゲン：2018/7/8（日）08:34

© YOHEI KATO 2018

No.1121: A Rumbling of the Earth

Japan has recently experienced unusual high temperature and a typhoon that had an abnormal movement from east to west. I think that such climatic changes are happening all over the world, and I can hear a groan of the earth. Groningen, 09:56, Monday, 8/13/2018

2805. 鳥の気持ち・空の気持ち

やはり内的感覚が湧き上がってきた都度文章を書いてみると、それがどれほど自分を落ち着かせ、自己を深めていくことにつながるかがわかってくる。普段私はそれほど日記を書き留めていないが、それでも一日に平均して原稿用紙10枚分(4000字)以上の日記を書いているように思う。以前から分かっていたが、やはりこれはあまりにも量が足りない。当然これまでは自分を抑制していたということもある。だが、この抑制をそろそろ取り払ってもいい頃なのではないかと冷静に考えて思う。

今から六年前にサンフランシスコの街を歩いている時に知覚した二枚の膜。正気と狂気の二つの膜が表裏一体の関係になっており、両者の膜の移動は私たちが思っている以上に容易かつ突然なされるということに気づいて以来、私は正気を保つ形でこれまで過ごしてきた。だが、欧州での生活を始めて以降少しずつ気がつき始めていたのは、狂気の世界に行く準備ができてきたということであった。厳密には、狂気の世界の中にあったとしても、狂気を正気に変容できる自己が誕生しつつあることを自覚し始めたのである。

それにしても鳥は見事に空を飛ぶものだなと感心する。あのように見事に飛ぶことができれば、狂気の世界もうまく渡っていけるだろう。白い鳥のゆったりとした優雅な旋回に思わず見とれてしまっていた。目を奪われる素晴らしい光景を目の当たりにした幸運。あれは慣性の法則を利用した飛行と言えるだろうか。

私たち人間はなぜあのように生きようとしないのか。慣性の法則を無視するほどの速度で動こうとする愚かな人間たち。

等速直線運動について調べてみると、それをこの人生に活用する際にはどうやら力を抜くことが重要だということがわかってきた。運動している物体に力が働かない場合、もしくは諸々の力が釣り合っ

© YOHEI KATO 2018

ている場合に慣性の法則が働くのであれば、その法則が人生にも働くように力を抜いてみるということ、自己を取り巻く諸々の力に調和をもたらすことが重要なのではないかということが見えてくる。力んでいてはダメなのだ。それではあの鳥のように優雅な旋回を大空で行うことはできない。

あの鳥が旋回していた時の気持ちになってみよう。自分ではない外側の対象の内部に入ってみること。それを行ってみると、鳥の気持ちになれる。それができなければ自分が自己という狭い檻の中に入っていることを知ろう。鳥の気持ちになってみると、実に気持ちが良い。自己が周りの環境に溶け込み、環境と同一化している感じがする。優雅に大空を旋回している鳥の気持ちになってみると、そのようなことが言える。

先ほどの鳥はもう姿が見えず、今は空にまた新しく別の小さな白いちぎれ雲が浮かんでいる。今度は雲の気持ちになってみようとした。さすがに無生物でそれをするのは難しい。だが、自己をくつろがせ、落ち着いてみればそれは不可能なことでは決してない。

雲の気持ち。空に浮かぶ雲の気持ちはまだ自分が体験したことのない気持ちに近いことがわかった。それは人間としての人生を終えた後に辿り着く場所で感じる気持ちに等しいと言えるかもしれない。

冒頭の主題に戻ると、とにかく日々の生活の中で湧き上がることを文章として書き留めておく。狂気という雲が晴れるまで文章を書く。狂気が正気となり、それがいかなる天気にもなりうる空になるまで文章を書く。いや空になっても文章を書き続け、仮に自分が今あの空に浮かぶ雲になった時だけが筆を置く瞬間なのかもしれない。フローニンゲン：2018/7/8（日）09:00

No.1122: A Drizzling Rain

It is drizzling this morning, but the weather forecast says it will stop in the evening. Today is a day when my spirituality is silently vibrating. Groningen, 09:15, Tuesday, 8/14/2018

2806. 部分と全体の詩

無数の星が降ってくるのが見えるかのような朝。今朝はそのような気分にさせてくれる朝だ。

昼食を迎えるまでまだ十分な時間がある。今日は日曜日であるから、通りを行き交う車や人の数は普段と比べ物にならないぐらいに少ない。今目の前に広がる景色は休日の雰囲気を体現している。

先ほど、早朝の習慣の一つである作曲実践を行おうとした。バッハの変奏曲を参考にしようと思い、楽譜を広げて最初の数小節を作ってみたところ、どうも気乗りがしなかった。このような日もある。

その曲の構造が幾分複雑であり、思考を十分に働かせないと模倣ができないようになっており、今朝は幾分に自分の思考が怠惰だったのかもしれない。バッハの変奏曲に範を求めるのではなく、短めの二声のコラールに範を求めて先ほど一曲作った。わずか八小節でも曲を作り続けていくこと。自分の内側から音を生み出し続けていくこと。これがどれほど大事であり、どれほど自分の魂を安らかにしてくれることか。

生み出されたのは本当にわずか八小節からなる曲であり、それは短い一つの詩であるように思えた。それは確かに短いのだが、それでいてそこに部分と全体の全てが内包されているように思えた。

一つの詩には作り手の全てが含まれている。そしてそれは次なる詩へと結びついていく。

一つの短い詩のような曲を作り続けていく自分なりの意義はそこにあると言えるだろう。一つの作品それだけを見ればそれは本当に小さな詩のような存在なのだが、そこにはすでに部分と全体が具現化されており、そうした詩の集積は巨大な部分と全体を生み出していく。

作曲をするという意識よりも、音で構成された短い詩を作っていくという意識を持ってみようと思う。なるほど、こうした意識が芽生えたのは、やはりここ最近詩に対して関心を持っていたことと何か関係があるかもしれない。

今日は午後からも引き続きバッハのコラールに範を求めて短い曲を作っていこうと思う。先ほど作った曲によって喚起される内的感覚を色鉛筆でデッサンしていたところ、色鉛筆を削る必要があることに気づいた。今からまずは色鉛筆を削ろうと思う。午後からのデッサンに備えるという意味でもこれは必要だ。色鉛筆を削り終えたら、マラルメの詩集“Stephane Mallarme: Collected Poems and Other Verse (2006)”をゆっくりと読み進めていこうと思う。残念ながら私はフランス語がわからない

© YOHEI KATO 2018

ため、見開きページの左側に掲載されているフランス語に関しては、その色と形を味わうに留める。右側のページに英語で掲載されている詩をゆっくり味わうようにして音読していく。

詩を真に欲する自己が芽生えたことを嬉しく思う。マラルメの詩を納得のいくまで読んだら、昼食の時間まで日記の編集を行いたいと思う。

今もまだ先ほど自分が作った短い詩のような曲が書斎の中に流れている。とにかく自己に還り、自己から始めること。自分の音と自分の言葉から開始させること。フローニンゲン：2018/7/8（日）10:20

No.1123: Toward a Ray of Hope

It stopped raining temporarily, and a little light was given to the world in a moment. I'll take a step to an inner ray of hope. Groningen, 09:25, Tuesday, 8/14/2018

2807. 色鉛筆と日本のそば

たった今、予定通りに色鉛筆を削り終えた。鉛筆を削っている最中、とても瞑想的な意識状態になった。すると、一本一本の色鉛筆がどこか愛しいものに思えてきた。また、手動の鉛筆削りを発明した人物の功績を讃えたいような気持ちになった。

瞑想的な意識状態の中、削られていく鉛筆の姿を見ていると、あることに気づいた。以前から気付いていたこととして、日々のデッサンで使われる色には傾向と偏りがあるということである。このことをふと思い出して色鉛筆を再度眺めながら鉛筆を削っていると、白と黒の色鉛筆がほとんど使われていないことに気づいた。特に白に関しては全くと言っていいほど使っていない。

この一ヶ月半の中で白を使ったのは一度ぐらいだったように思う。確かに、白のノートに対してどのように白の色鉛筆を使ったらいいのかという問題もがあるが、もしかすると、内的感覚というものが、いやこの世界そのものが単純に白と黒の二色では表せないような複雑な存在なのではないかと思ったのだ。

世界はもっと多元色なのだ。多彩な色彩を持つこの世界で今日も私は生きている。

何をすることもなしに、何かに没頭しながら何かをして今日という日を過ごしている。鉛筆を削り終えてみると、瞑想的な意識状態から戻り、再び活動に向かう意識の状態となった。

それにしても今朝は幾分寒かった。もう七月に入って一週間を過ぎたというのに、早朝は本当に肌寒かった。そのため書斎の窓を閉めて一日の仕事に取り掛かることにした。そうした中で、協働執筆中の書籍の原稿で描かれている場面についてふと思い出した。協働執筆者の方が書いた文章の中に、登場人物がそばを食べる場面がある。その文章を読みながら無性にそばが食べたくなってきたのである。暖かいそばであっても冷たいざるそばであっても構わない。とにかく日本のそばが食べたいという思いに駆られた。

正直なところ、今この瞬間もそばが食べたいと思っている。だが、この街に良いそば屋があるとは到底思えない。アムステルダムやロッテルダムならあるかもしれない。北欧に近いオランダのこの街で日本の夏を想う。

先ほど幾つかの日記を編集し終えた。編集作業にも変動性を加えることが作業の質を高めることに改めて気付く。これまでは一気にまとまった分量の記事を編集するようにしていたが、そうではなくて三つぐらいの記事をひとまとめにして、それらを編集し終えたらウェブサイトに投稿するための写真を眺めることにし、そこから再び三つほどの記事を編集するということを行うようにしたら、随分と集中力を持って編集に当たれることがわかった。

文字だけを見ていてはやはり集中力が途切れてしまう。絵画のような視覚的なものを文章の編集の合間に挿入するだけでも随分と集中力が高まる。日記を書き、書物を読み、画集を眺め、音楽を聴くことがうまく一つの調和のとれたまとまりの中で営まれつつある。こうしたことが、日々の生活の充実感と幸福感を生み出すことに間違いなく寄与している。今日もこれから複数の感覚を刺激し、一つの統合的な感覚を形成するような諸々の事柄を行き来しながら一日を過ごしていく。フローニンゲン：2018/7/8（日）11:52

No.1124: The Turquoise Galaxy

It was cloudy in the early morning, but it turned into a sunny sky. I was just daydreaming about the turquoise galaxy. Groningen, 09:30, Wednesday, 8/15/2018

© YOHEI KATO 2018

2808. マラルメの詩集とシュタイナーの音楽理論

先ほど午後の仮眠を取り終え、これから再び午後の活動に取り掛かろうと思う。それにしても先ほどの仮眠は随分と深い眠りの意識に入っていたものである。わずか20分の仮眠だったのだが、自己がコーザルの意識に完全に参入していたように思う。目覚めてみて大きな回復感を覚えたのは、やはりコーザル意識という層が治癒的な働きを司るものだからかもしれない。先ほどの深い仮眠のおかげで夕方からの活動がはかどりそうだ。

今日は早朝から創造活動に十分に従事した。早朝はやはり創造活動に時間を充てる必要がある。くれぐれもインターネットで何かを調べるような形で早朝の時間を浪費してはならない。

早朝に一曲ほどバッハのコラールを参考にして短い曲を作った。夕方にも一曲、あるいは二曲続けてバッハのコラールを参考にしてもいいかもしれない。夜にはテレマンを参考にして曲を作ることができればと思う。そうすれば今日は四曲ほど作ったことになる。

呼吸をするように、日記を執筆するように作曲を自分の存在実践としていく。その着実な一歩を今日も歩んでいるという実感がある。この実感を毎日感じられることが日々の足取りを確かなものにしてくれる。

午前中にマラルメの詩集を少し読んだ。マラルメの詩の世界とドビュッシーの音楽の世界には親和性があるという記述が印象に残っている。それを確かめるかのように、私はマラルメの詩集を音読していた。もちろん、詩の細部を含めて全てが理解できることはほとんどないのだが、音読によってマラルメが詩の中に吹き込んだものを感じることができつつある。それは喜ばしいことである。

本書の冒頭の解説文に、「マラルメの詩からリズムを奪うことは、マラルメの詩から「詩」を奪うことにほからない」という文言があった。これを読んだ時、思わず唸ってしまったが、まさにその通りだと思う。この文言を読んで以降、なおさらマラルメの詩のリズムを捕まえるごとく音読に精を出した。今日も夕食の前後に時間があれば、再度マラルメの詩集を読みたいと思う。

時刻は午後の六時を迎えた。早朝に予定していた通り、“Intervals, Scales, Tones: And the Concert Pitch c = 128 Hz (2015)”を午前と夕方に随分と読み進めることができた。夕食後に再度

© YOHEI KATO 2018

本書を読むつもりであり、今日中に初読が完了するだろう。本書を読みながら、改めてシュタイナーの音楽理論に対する関心が湧いてきた。もちろん、音楽理論や作曲理論に精通していることが作曲の技術を担保しないのだが、それらに精通することによって作曲で表現できることの幅と深さを広げていきたいという考えがある。最優先されるべきは作曲の実践であって、作曲の勉強では決してないのだが、それでも全く勉強しないというのでは問題だ。

シュタイナーの音楽理論、そして本書で記載されている事柄を学んでいくことは、超越的な感覚世界を曲として表現する上で非常に大切な洞察をもたらしてくれるだろう。そうした知識こそがまさに叡智と呼ぶものにふさわしいのではないかと思う。

夕食後はまず本書を最後まで読み通し、その後に作曲実践を行う。明日以降も少しずつ音楽理論や作曲理論の学習を進めていく。フローニンゲン：2018/7/8（日）18:26

No.1125: Shopping of a Jocular Clown

Today is a day when a jocular clown is likely to go shopping. I have such a feeling now.
Groningen, 09:45, Wednesday, 8/15/2018

2809. 新たな週を迎えて

今日から新たな週を迎えた。今朝は五時半に起床し、今日はゆったりとしたリズムで一日の活動を開始させた。今日の天気は曇りであり、最高気温は19度と低い。書斎の窓を開けていると肌寒かったので、先ほど窓を閉めた。

先週の水曜日に修士論文を提出してからまだ一週間が経っていないことに少々驚く。もう随分と前に論文の提出を終えたかのような感覚がある。論文の提出を終えてからの私は、これまで以上に探究活動と創造活動に従事する足場を固め始めた。今日もそのような一日になる。

今日はまず最初にフィリップ・テレマンに範を求めて一曲作る。昨夜もテレマンに範を求めて曲を作っていた。曲の構造としては簡潔であり、今の私にとってテレマンの曲は、範を求めて学習を進める上では最適の教材なのではないかと思う。テレマンの曲を参考にして一曲作ったら、昨日に引き続

き、マラルメの詩集“Stephane Mallarme: Collected Poems and Other Verse (2006)”を読み進めていく。昨日からこの詩集を音読しながら読み進めている。

詩の世界に入って行き、一つの詩を理解しようとする際に、音読することがどれほど大切なことかを改めて知る。プラトン主義や新プラントン主義の影響を受けていたと言われるマラルメの作品には、やはり超越的なものを体現するような詩作がいくつもある。そうしたマラルメの作品は、超越的な世界を覗き見るための窓のような役割を果たしている。

マラルメの詩集を読み進めた後は、昼食前に一度、過去の日記の編集を行いたい。過去の日記が溜まっているため、昨日から九つずつ過去の日記を編集していくことにした。まずは三つの日記を一気に読み、その後、その日記に合致するような写真を選ぶ。そのサイクルを三回ほど繰り返せば昼食どきになるだろう。

昼食後にはバッハのコラールに範を求めて作曲をしていく。その曲は短いものになるだろうが、マラルメの詩のように、短いながらも何かを喚起させてくれるものを曲の中に体現させていきたい。それが感情なのか意思なのか、超越的な感覚なのかはわからないが、とにかく作り手の内側にある何らかのものを曲の中に表現し、曲を聴いた時にそれが喚起されるようにしていきたい。その実現に向けた技術の洗練を怠らないようにしていく。

午後からは再度改めて、発達理論に関する専門書を読み進めていく。これは科学的なものというよりも思想的なものだ。書斎の机の右隅に積み重ねられている何冊かの書籍のうち、まずは一冊を読み進めていく。確かに私は今回三つ目の修士号を取得したことに伴い、科学的な研究をすることからは一旦離れるようにする。しかしそれは科学そのものから離れることでは決してない。確かに今日は思想的な側面で人間発達について探究を進めていくが、今後もまた科学的な側面からも人間発達を探究していくだろう。

ただし、その足取りの速度に関してはこれまでよりも緩やかなものにしていく。なぜなら、芸術教育や美学など、その他により強い関心を示す領域があるからである。フローニンゲン：2018/7/9（月）07:46

© YOHEI KATO 2018

2810. テレマンの曲と生命のつながり

早朝から曇り空が続いている。天気予報を確認すると、一日のどこかで晴れ間が顔をのぞかせるようだが、それがいつなのかは定かではない。とにかく今日は肌寒い。書斎の窓を開けることは極力控えることになるだろう。そうした肌寒さの中にあって、どこか自分の内側で花の挨拶が聞こえてきそうだ、ということを先ほど思った。

確かに外は肌寒いのだが、そうした寒さを忘れさせてくれるような暖かさがどこか辺りに立ち込めている。もちろんそれは決して肉眼で見えるようなものではない。心眼でのみ見えるような類いのものだ。心眼を用いて暖かさが立ち込めてくるのを眺めていると、花々がこちらに向かって挨拶をしてきてくれるかのような感覚になる。花はいつでもこちらに向かって挨拶をしてきており、挨拶の声を聞くことはいつでも可能なのだということを知る。

書斎の中にはフィリップ・テレマンの曲が鳴り響いている。今日はこれからテレマンの曲に範を求めようと思っており、その前にテレマンの曲を聴くことにした。いや、おそらく今日は一日中テレマンの曲を聴くことになるだろう。

テレマンの曲を聴きたいという衝動が自分の内側の中にある。ヘンデル、そしてバッハとも親交のあったこの偉大な作曲家の曲に浸る形で一日を過ごす。テレマンから汲み取れるものを少しずつ汲み取っていく。一度に大量に何かを汲み取ろうとするのではなく、焦ることなく少しずつ汲み取れるものだけを汲み取っていく。

今日は肌寒さだけではなく、少々風が強い。目の前の街路樹の葉の揺れがここ数日よりも大きなものになっている。空を飛ぶ鳥たちもこの風の影響を受けているようである。

未だ新緑と形容できるような青々とした街路樹に生命力を感じる。できるだけ長くその生命力を感じていたいと願うのは私だけだろうか。おそらくそうではないだろう。街路樹に休みに来る鳥たちも同じことを思っているに違いない。秋がやってきて、街路樹の葉が散るまでにはもう少し時間がある。

この瞬間の街路樹の生命力を味わうこと。私にできるのはそれくらいだろうか。だが、それをするのとしないのとでは大きな違いがあるように思える。

© YOHEI KATO 2018

今というこの瞬間に発露する他の生命の生命力を感じること。それは紛れもなく、今この瞬間の自分の生命力を感じることに他ならない。

二つの異なる生命のつながりをここに見てとることができる。生命はつながり、お互いの生命力は影響を与え合っているようだ。だから私は街路樹を眺め、だから小鳥は街路樹の上で休むのである。

先ほど過去に作った曲を聴いていた。すると、熱情は断片的な情熱の単なる寄せ集めなのではなく、その総体だということに気づいた。全体と部分の話、そして熱情と情熱の話。単に部分を寄せ集めても、一つの全体として機能するわけではないことに関心を持つ。

雲行きが怪しくなってきたが、今日は本当にこれから晴れるのだろうか。今日も一日中窓の外に広がる景色を眺めながら、探究活動と創造活動に励んでいく。フローニンゲン:2018/7/9(月)08:42

2811. 発達の「ユートピア的アトラクター」について

テレマンの曲を参考にして一曲作った後、マラルメの詩集を少しばかり読み進めた。今詩集を机に置き、先ほどの作曲実践について少しばかり振り返っている。

テレマンの短調の曲の中になんとも言えない美しいメロディーとハーモニーがあった。その美しさは哀しみが持つ輝きのようであった。

今も書斎の中にはテレマンの曲が鳴り響いているが、こちらの曲は長調の明るい輝きを発している。当時バッハ以上に評価が高かったと言われるテレマンの作品群から学ぶことはとても多い。午後からもテレマンを参考に一曲作り、その後にバッハのコラールを参考にして曲を作っていく。

マラルメの詩集を読み終えた後、発達理論の専門書を読み進めていた。前回の続きから読もうと書籍を開けてみると、以前その書籍を読んでいたのが三月の中旬であることがわかった。どうやら四ヶ月ほど本書を放置していたようだ。続きを読み進めていくと、発達論者のピエール・テイヤール・ド・シャルダンの考えの中に面白いものがあった。それは「ユートピア的アトラクター」と呼ばれるものである。これは端的には、人間の発達における極致であるオメガ・ポイントが私たちの永続的な発達を導いていくという考え方である。確かに、仏教などの伝統的な宗教における意識の発達思想を含め、

発達科学における発見事項からも、人間の発達の極致がどのようなものなのかについては随分と多くのことが明らかになっている。

もちろん、現代においてそれらの特性がどのように発露するのかについては不明な点があることは確かだが、一般的に意識の発達と呼ばれる人間の発達についてはかなりのことが明らかになっている。

発達のオメガ・ポイントというのは、人間が到達しうる発達段階の極致のことを指し、それが人類の進化を引き上げる作用を持つというのがユートピア的アトラクターという考え方である。テイヤール・ド・シャルダンのこの考え方は非常に興味深いものの、どうも発達のオメガ・ポイントはそのように人類の進化を引き上げるようには働いていないのではないかと思うことが少なくない。端的には、テイヤール・ド・シャルダンの「ユートピア的アトラクター」という発想そのものがユートピア的なものなのではないかと思う。

実際のところ、発達科学の進展などによって発達の極致が明らかになってくることによって、確かに人々はそれらの段階に到達することを目指そうとし始めるが、果たしてそれが成功しているかというと、大きな疑問が残る。むしろ、発達の極致が明らかになることによって、人々が盲目的にその極致へ向かおうとすることが逆に人類の進化を妨げているようにも思える。

複雑性科学の概念を用いれば、これはアトラクターというよりも、「リペラー（repeller）」と呼べるのではないだろうか。リペラーはアトラクターとは対照的に、システムの挙動を不動点から遠ざけていく。発達の極致の特性が徐々に世に知られるようになるにつれ、人々はそこを目指そうと尽力するが、かえってそれがその地点に到達することを妨げている。そのような現象が見受けられるような気がしてならない。そうでなければ、この現代社会の未成熟さを説明することは非常に難しい。テイヤール・ド・シャルダンが提唱した「ユートピア的アトラクター」のユートピア性についてはこれからより考えを深めていこうと思う。

今はとりあえず書籍を読み進めながら思いついたことを走り書きしておくことに留める。フローニンゲン：2018/7/9（月）11:17

© YOHEI KATO 2018

2812. 作曲技術の涵養に向けて

時刻は昼食どきを迎えた。昼食を迎える前に何かを書き留めておきたいという衝動が湧き上がったので、それに従う形で文章を書き留めておく。

それにしても今日は本当に空一面が雲に覆われている不気味な天気だ。天気予報を確認すると、このような曇り空であるにもかかわらず雨は一切降らないらしい。それどころか、午後からは太陽が顔を覗かせるそうである。空を覆う幾分分厚い雲を見ていると、天気予報を信じることはどうも難しいが、午後を待ってみたいと思う。

表情豊かな空を曲として表現したいという思い。これは以前にも湧き上がっていたものであり、今日もまたその思いに駆られた。また、自分を捉えて離さない建築物についてもその表情を曲として描き分けたい。空や建築物以外にも、目の前の街路樹だって曲として表現してみたいという思いで一杯だ。自己を取り巻く生物と無生物を曲として表現するための修練の日々が続く。

それらを自由に曲として表現するためにはどのような技術が求められるのかについてより考えていく必要がある。実際には、単にそれらを曲として表現していても意味はなく、重要なことは、それらから喚起される自分に固有の感覚を曲として表現することである。そうなってくると、自分の感覚を望む形に曲として表現していくというより具体的な技術を獲得していくことの大切さが明らかになってくる。この技術についてはより具体化することが可能だろう。メロディー、ハーモニー、リズムの三要素を踏まえた上で、いかに自分の内的感覚を純粋な形にしていくか。その技法の探究と実践を今日もこれから行っていく。

冷たい風が街路樹を揺らしている。今日の風は昨日よりも強い。そしてどこか寂しげな様子に見える。

風の動きの機微、そして風から喚起されたその寂しさの感情を曲として表現していく。さざ波のような動きに関しては装飾記号を活用することやリズムの工夫が考えられる。寂しさの感情は最適な調性を選択することとメロディーやハーモニーがカギを握るだろう。やはりそれらの個別個別の項目にとにかく習熟していくことが求められる。その一方で、絶えずそれらの学習が自己の内的感覚を望

© YOHEI KATO 2018

むような形にするために行なわれているということを忘れてはならない。そうした意識のない学習や実践は有益ではない。

書斎の窓ガラスをよくよく見てみると、小さな雨粒が付着していることに気づいた。天気予報とは異なり、雨が降っているではないか。見る見るうちに小雨の存在感が増している。風の動きとそれが引き起こす寂しげな感情、そこに小雨が加わったら、それを曲としてどのように表現できるだろうか。転調の技術を活用することやリズムやメロディーに変化を加えることなどが思いつく。方向性は徐々に明確になってきた。あとは兎にも角にも技術を磨いていくということ。

午後からの作曲実践も技術の涵養を強く意識していく。作曲実践に没頭しているうちに雨も上がるだろう。フローニンゲン：2018/7/9（月）12:30

2813. オーロラとモネ

極々わずかだけ小雨が降り続けている。書斎の窓には未だ雨滴が小さく付着している。

先ほど昼食を摂り終え、これから午後の活動に入っていく。昼食後にはまず作曲実践を行い、仮眠を挟んでさらにもう一度作曲実践を行う。その後、午前中に読んでいた発達理論の専門書の続きを読み進めていく。本書はできれば今日中に最後まで読むことができれば思う。

窓の外の景色を眺めていると、ふと数日前に散髪をした際に、美容師のメルヴィンとオーロラについて話をしていたことを思い出した。お互いの夏の休暇、さらには冬の休暇についての話をしていた際に、私が冬にオーロラを見に行こうと思っているということを伝えた。するとメルヴィンは、彼の婚約者が以前に北欧にオーロラを見に行った時の感動について共有をしてくれた。「それはこの世のものとは思えないほど神秘的で、自分の婚約者は思わず涙を流してしまったそうだ」ということをメルヴィンが述べていたのを思い出す。

オーロラのような幻想的かつ極上の美がこの地球上に存在することに改めて畏怖の念を持つ。メルヴィンも私も都市型生活よりも自然をこよなく愛するという点で共通しており、オーロラの美しさ及びその神秘性について話が盛り上がった。

© YOHEI KATO 2018

メルヴィンとの話を思い返していると、彼の婚約者がオーロラを見て思わず涙を流してしまったように、オーロラには人間の心を打つ何かがあるのだろう。それは魂を震わせる何かだと言っていいかもしれない。

オーロラの観測で有名なノルウェーのトロムソを訪れてみたいという思いが再燃した。しかし私はトロムソの街に滞在しながらオーロラを眺める機会を待つよりも、船の上で過ごしながらオーロラを見る機会を待ちたいという思いが強くなっている。調べてみると、街からオーロラを見るよりも、人工的な灯りが少ない海からの方がオーロラが綺麗に見えるらしいことを知った。また、オーロラ観測向けのクルーズツアーも存在していることを知った。

いくつか目星のクルーズを見つけたところ、イギリスの船には現役の宇宙物理学者が乗船し、オーロラ及び宇宙について解説をしてくれるサービスまで付いているものもあった。秋に欧州の都市に旅行に出かけるぐらいなら、それを控えて、冬にオーロラ観測のクルーズツアーに参加した方がいいのではないかと考え始めている。時期としては来年の一月か二月のどこかになるだろう。少し気が早いかもしれないが、来年初旬の旅行について思いを巡らせていた。

ちょうど今、モネが夕暮れの砂浜を描いた作品を見て大きな感動を覚えた。夕日が海面に輝くように反射している様を見事に描くあの技術はいかようにして獲得されたのか。モネの凄さを改めて実感する。モネについては、ロンドンのナショナル・ギャラリーで購入した画集とDVDを改めてよく鑑賞したいと思う。ナショナル・ギャラリーを訪れたあの日、モネの特別展示を鑑賞して本当に良かったと思う。

それまでの私は、モネの偉大さについては知っていたし、素晴らしいと思わせてくれる作品があることもわかっていた。だが、あの特別展示を見て、モネに対する敬意がより一層強まったように思う。一人の表現者として、モネから汲み取れることは泉のように計り知れないだろう。

ふと顔を上げると、雨が止んでいた。もしかしたら、これから本当に晴れ間が差し込んでくるかもしれない。フローニンゲン：2018/7/9（月）13:40

© YOHEI KATO 2018

2814. 創造性の源と霊性

時刻は午後の七時半を迎えようとしている。結局今日は一日中曇り空であった。今もまだ灰色の雲が空全体を覆っている。

午後には小雨が降り始めた。明日は早朝から午前中にかけて雨が降るようだ。

今日はテレマンの曲を参考に二曲作り、モーツァルトの曲を参考に一曲作った。結局、バッハの曲に範を求めることはなかった。テレマンとモーツァルトの曲に範を求めながら、現代社会においてあのような巨人と呼べるような作曲家がほとんどいないことに考えを巡らせていた。私が知らないだけなのかもしれないが、あれだけ多産な作曲家が現代に存在していないのは何故なのだろうかと考える。

作曲理論に関する知識の集積は当時よりを遥かに豊かであり、コンピューターの発展によって作曲をするための道具についても極めて便利になった。そうした事情にもかかわらず、作曲において巨人と呼べるような人が現代社会にほとんどいないように思えるのはなぜなのだろうか。

何が表現者の多産性を奪っているのだろうか。これは言い換えれば、現代の何が表現者の創造力を奪っているのだろうかという問いになるだろう。この問題については真剣に考えなければならない。これは自分にとって極めて重要な問題だ。この社会の何かが私たちの創造性を蝕んでいるのだ。芸術教育や霊性教育を考える際に、この点は避けて通れない論点となるだろう。

今日はこれから就寝にかけてマラルメの詩集を読み進めていこうと思う。今日はすでに三曲ほど曲を作ったので、これ以上作曲実践に時間を充てることは賢明ではないだろう。以前の日記で書き留めていたように、ある一定量以上作曲実践をすると曲を作る集中力が途切れてしまう。もしくは、新たなものを創造する力が弱まってしまうのを感じる。この点において、私はまだ作曲に関しては創造の泉につながっていないことがわかる。たった三曲ほど作っただけで集中力や創造力が枯渇しそうになるというのは問題だ。これから作曲技術を高め、音楽的な感性を育み、さらには内面そのものを成熟させていくことによって創造の泉につながっていくことができるだろう。

© YOHEI KATO 2018

今、創造の泉につながる道について述べたが、もしかすると一番重要なのは自らの霊性の涵養なのかもしれない。シュタイナーが述べているように、音楽が生まれる源と霊性は密接に関係している。全ての創造を司る源泉とつながるためには己の霊性を涵養していく必要がある。霊性を涵養する手段と方策についてこれからより一層考えていく。

マラルメの詩集を読むことは、ひょっとすると、いや必ずや、自分の霊性を豊かなものにしてくれることにつながるだろう。今日中に全ての詩を読むことはできないであろうから、明日や明後日にわたってマラルメの詩集を読み進めていきたい。マラルメの詩集を読み終えたら、ルーミーの詩集を読み始め、それを読み終えたら、昨日届いたリルケの詩集を読んでいく。フローニンゲン：2018/7/9（月）19:40

2815. スペインリーグへの出場と仮想通貨投資に関する夢

今日は朝から雨が降っている。起床時に、朝日が寝室に差し込んでおらず、今日も昨日に引き続き優れない天気だということを知った。今も小雨が降っており、風も幾分強い。そんな天気を物ともせずに、二羽のカモメが空を横切っていくのが見えた。天気予報を確認すると、どうやら昼まで雨が降り続けるらしい。

今朝方は夢を見ていた。記憶に残っているシーンは少ないが、覚えている範囲のことを書き留めておく。夢の中で私は、異国の地のサッカー場にいた。どうやら今から試合に出場するようだ。

ちょうどベンチから腰を上げ、試合の開始に向けて整列しようとしていたところ、私の眼の前に日本人の少年がいた。年齢は中学生ぐらいだろうか。どうやら彼もこの試合に出場するらしかった。彼は私が日本人であることにまだ気付いていないようだった。しばらく後ろで様子を見ていると、彼が友人らしき他の選手とスペイン語で微笑みながら会話を始めた。彼が話すスペイン語はとても流暢であり、日本人のそれとは思えなかった。どうやら彼はこの国で長く生活をしているようだ。

サッカー場に着いた時から薄々感じていたが、この場所はスペインだ。しかも首都のマドリードのようだ。今私が出場しようとしている試合は、スペインリーグの下部組織同士が対戦する試合に該当する。しかもそれは二部リーグであるから十分にレベルが高い。それにもかかわらず、私の前に並

んでいた少年は中学生ぐらいの年齢であった。きっと彼は素晴らしい才能を持っているのだろうと私は思った。

しばらく彼の様子を観察していると、どうもスペイン語だけではなく、英語も流暢に話すらしいことが他の選手とのコミュニケーションからわかった。こうした日本人の若者がいることを、そして異国の地で存分に自分の能力を発揮できていることを嬉しく思った。そのような思いを胸に抱いていると、いつの間にやら試合開始のホイッスルが鳴っていた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、小中学校から付き合いのある友人の一人が仮想通貨に投資している様子を眺めていた。体育館のような場所に大勢の人が集まり、友人もそこにいて、ビットコインに投資をしているようだった。体育館の壇上の壁にはビットコインの値動きをリアルタイムで知らせる巨大なモニターが設置されており、壇上には一人の投資家が何かを話していた。私は友人がせっせとビットコインの売り買いを行う様子をずっと眺めていた。

私はなぜビットコインに投資するのか理解ができなかったが、友人は裁定取引により、数秒の間に120万円ほど利益を得たらしい。その金額は大きなものに見えるかもしれないが、私はリアルタイムで投資をするストレスと時間の浪費という側面を考え、友人の投資手法は全くもって魅力的なものではないと思っていた。

友人と投資手法についてディスカッションしようと思ったところでまた夢の場面が変わった。次の夢についてはもうほとんど覚えていない。今朝方はそのような夢を見ていた。

自分が見た夢について深く知ることは自己を深く知ることにつながる。先日読んだオーロビンドも同じようなことを言っていたと記憶している。

夢については今後も覚えている範囲であれこれと書き留めておきたい。書き留められた夢について何をするかはいつも決まっていないが、それでも今はとにかく夢を書き留める過程の中で自己の気付かぬ側面に光を当てていく。夢を書き留めることは、自己のシャドーに光を与えることなのだ。フローニンゲン：2018/7/10（火）07:48

© YOHEI KATO 2018

2816. 夢とシャドー

つい先ほど、今朝方に見ていた夢について書き留めていた。ここ最近思うのだが、夢に登場する見知らぬ人物はもしかすると自分に他ならないのではないだろうか。厳密には、夢に登場する人物は、自己のシャドーのある一つの側面を体現したものなのではないか、ということである。ここでシャドーとは当然ながら否定的なものと肯定的なものの双方が含まれる──より超越的な視点で見れば、全てのシャドーは中立的なのだが。

今朝方の夢の中に現れたあの日本人の少年はもしかしたら自分なのかもしれない。上記の仮説に基づけば、あの少年は自己のシャドーのある側面であり得るかもしれない、という考えが芽生える。

スペイン語と英語を流暢に話し、チームメイトと活発にコミュニケーションを図るあの少年の姿を忘れることはできない。あの少年が仮に自己のシャドーのある側面を体現した存在であるならば、それはどのような側面を体現したものだと言えるだろうか。これに回答することは実に難しい。考えられることはいくつかあるが、どれも深く自分を納得させることをしない。

これはシャドーに対する自分の理解が浅いためなのか、そもそも上記の仮説が根本から間違っているかのどちらかを示しているように思える。感覚的に可能性は前者である。なぜなら、上記の仮説が根本から間違っているということを感じさせない直感的な確からしさが自分の内側にあるのを感じているからだ。

シャドーに対する自己認識を今後も高めていかなければ、夢の中で開示される自己の側面に気づくことができなくなってしまうだろう。シャドーに対する理解を深めていくことは終わりなく続く実践のうちの一つだ。

実はもう一つ仮説のようなものがある。それは、夢に登場する知り合いですらも自己のシャドーのある側面に他ならないのではないか、というものである。

夢の中でビットコインに投資していた友人。彼は自分のどのようなシャドーを体現したものなのだろうか。彼の投資手法は目先の利益しか追いかけておらず、実に近視眼的なものだった。私が彼の投資手法を批判しようとしていた点は、なぜチャートを眺めるだけのテクニカル分析しかしないのか

© YOHEI KATO 2018

という点、つまりなぜ投資対象の実質的な価値や有用性などに着目しないのかという点だった。要するに、ファンダメンタルズ分析をしない点に私は批判の矢を向けていた。つまるところ友人の投資手法は目先の利益しか追いかけず、近視眼的であり、ファンダメンタルズ分析を怠っているという点において本質を捉えていないのである。そのようなことを夢の中で思っていた。

では仮にこの友人が自己のシャドーのある側面を体現しているという仮説に従うならば、多分に私にも彼と同じような側面があるのではないか、ということが見えてくる。それはもちろん投資に関してではない。投資においてファンダメンタルズ分析を怠るということはない。だが、日常のそれ以外の事柄についてはどうだろうか。どこか近視眼的になってはしないだろうか。本質を見失っていることはないだろうか。そのような問いが自分に向かう。

それらの問いに静かに考えを巡らせる自分が今ここにいる。やはり夢は私たちにいろいろなことを教えてくれる。とりわけ自己について豊穣な洞察を内包しているのが夢の本質だ。

日々の学習や実践において、確かに私はテクニカル分析のようなことしかしていないかもしれない。ファンダメンタルズ分析をする必要性にはたと気づかされた。この気づきをもたらしてくれたのはまさに今朝方の夢であった。フローニンゲン：2018/7/10（火）08:08

2817. 肌寒い早朝より

雨が降っているためか、今朝は一段冷え込んでいる。非常に肌寒く、書斎の窓を開けることなど当然できない。

先ほど暖かいコーヒーを入れ、九時半を過ぎたあたりからコーヒーを飲もうと思う。その前に、はちみつを入れたホットヨーグルトを飲むことにする。そうした暖かい飲み物を飲むことによって少しばかり体も温まるだろう。

七月を迎えてすでに10日が過ぎたが、依然としてこのような肌寒さが続く。今週一週間は似たような気温になるようだ。ただし、明日からは晴れ間が戻るようであるから、体感温度は上がるに違いない。明日は晴れるということもあり、近くのノーダープラントソン公園へランニングに出かけようと思う。

先ほどまで思い出していた今朝方の夢についてまだ少しばかり考えている自分がいる。夢は自己のシャドーを映し出す鏡だと言われるが、本当にその通りである。こちらが思っていなかったようなことを映し出してくれるという点において、幸か不幸か夢は強い力を持つ。

今朝方の夢は決して悪夢ではないのだが、悪夢を見て目覚めるまでに背筋を通り抜けていくあの感覚をふと思い出していた。今朝の気温が低いということと何か関係があるのだろうか。直接的な関係はないだろう。しかしそれにしても今朝は本当に冷える。

室内でも長袖を着ている必要があるかもしれない。昼食後にスーパーに行こうと思っていたのだが、その時には少しばかり暖かい格好をして出かける必要があるかもしれない。

今日はこれからテレマンに範を求めて作曲をしていく。ここ数日間テレマンの曲を参考にしているが、いつも大きな発見がある。些細なことかもしれないが、テレマンはどのように小節の割り振りを考えていたのかが気になる。というのも、ここ数日間参考にしている曲はどれも四つの小節を一つの単位とした四の倍数で落ち着かない形で終わっているからだ。別に小節が四つずつである必要はないのだが、四つの小節を一つの単位とすることは一般的であろうから、テレマンがどのような意図で小節の割り降りをしていたのかが気になるところである。そうした点も踏まえて、今日もこれからテレマンに範を求めていく。午後からはモーツァルト、そしてバッハに範を求めて曲を作っていく。

これから一曲を作ったら、一旦作曲から離れて、マラルメの詩集の続きを読みたい。一気に多くを読むのではなく、少しずつマラルメの作品を読み進めていく。

午後に仮眠を取り終えた後から、久しぶりに“The Excecutive Mind: New Insights on Managerial Thought and Action (1983)”を読み返したいと思う。本書はタイトルの通り、企業組織のエグゼクティブのマインドについて扱ったものであり、何人かの発達論者も本書に論文を寄せている。本書は確かに現在取り掛かっている協働プロジェクトを進めることと関係しているが、この時期に改めて本書を読み返すのも悪くはないという考えが芽生えた。今日も旺盛な創造活動と読書に従事したいと思う。フローニンゲン：2018/7/10（火）09:12

© YOHEI KATO 2018

2818. 空白の時間と船旅への思い

時刻は夕方の四時を迎えた。昼食後からようやく雲が晴れてきて、今は晴れ間が顔を覗かせている。太陽が時折雲に隠れたり出たりを繰り返している。

先ほど近所のスーパーに散歩がてら行ってきた。欧州での三年目の生活において、数日に一回スーパーへ行くことが主な外出になるだろう。その他には週に一度ランニングに出かけることと旅ぐらいしかない。後者は幾分極端に映るが。

つい今しがたテレマンの曲を参考に一曲作った。実質上、今日はテレマンの曲を参考にして二曲を作ったことになる。当然ながら各作曲家には個性があるため、参考にする作曲家が違えば得られるものが異なるのだが、テレマンから得られるものはまだ言葉にならないような感覚として存在し続けている。これがテレマンの曲を参考にすることの面白さの一つになっている。

明日からもしばらくテレマンの曲を参考にするだろう。今日は夜にもう一度作曲実践をする際にはモーツァルトの曲を参考にするのではなく、バッハの曲を参考にしようと思う。

今日はこれからマラルメの詩集を読み進めていく。ゆっくりと読み進めていく計画だったのだが、思いの外に詩作を読み進めることができ、今日中に一読目が終わりそうだ。マラルメの作品には難解なものが多くあるが、その一方で引き込まれる作品も多々ある。難解な作品を今すぐに理解しようとすることは不可能であるため、そうした作品とは気長に付き合っていくことにする。

雲間から太陽の光が再び地上に差し込んできた。空をぼんやりと眺めながら、日々の生活の中に何も考えない空白の時間を設けることの大切さを思う。よくよく考えてみれば、私の場合はまさに窓の外をぼんやりと眺めること、そして入浴など、いくつかそうした空白の時間なるものが存在していることに気づく。何か日記として書き残しておこうと思うものはそうした空白の時間に着想を得ることがしばしばある。

街路樹の葉の先端をぼんやりと眺めたり、木々全体が揺れる姿などをぼんやりと眺める。自分の日々はこうしたぼんやりとする時間に支えられていることを知る。自然を見ながら空白の時間を楽しむこ

© YOHEI KATO 2018

とほど満たされた感覚をもたらしてくれるものもない。何も考えることなく、自然をただ眺めるような心のゆとりを絶えず持ちたい。また、そうした自然がそばにある場所で絶えず生活を営みたいと思う。

初夏の雰囲気がそうさせるるのか、先ほどまた船旅について調べていた。日本の豪華客船による世界一周の旅について調べていると、乗船客の平均年齢が70歳を超えていて驚いた。さらには、50歳以下の乗客の数が1%未満と表示されていてなお驚いた。確かに一般的には60歳未満の年齢は退職をしていない年頃であり、そうしたことから乗客の平均年齢が上がっているのかもしれない。

世界一周旅行ともなると確かに勤め人がこれだけ長期間仕事を休むことはほぼ不可能だろう。世界一周の船旅に関する日記を執筆しているウェブサイトが幾つかあり、それを少しばかり読んでいた。現代においてもまだ海賊がいるらしく、海賊が出没しやすい地域とその犯行手口について自分なりに調べていた。そんな調べ物をしていると、時刻はどんどんと日没に向かっていることに気づく。

今日はこれから発達理論の専門書を読み、夕食後に作曲実践を再度行う形で一日を締めくくりたい。船旅への憧れが静かに心の中でゆらめいている。フローニンゲン：2018/7/10（火）17:09

2819. 音色を捉える心眼と魂の形成期について

今朝は昨日のように空一面が雲に覆われているのではなく、部分的に雲がある。早朝の七時において雲がまばらに存在しているが、これから少しずつ雲が晴れていくらしい。今日の最高気温は22度であり、とても過ごしやすいと言える。昼前に近所のノーダープラントソン公園へランニングに出かけようと思う。

今朝の目覚めの瞬間には小鳥の鳴き声が聞こえていたが、今はそれが聞こえない。風は昨日よりも緩やかで、微風がフローニンゲンの街をゆっくりと通り過ぎていく。

今日はこれから作曲実践に取り掛かりたいと思う。まずは過去に作った二曲を編集することに着手する。その際に、いつもの通り、曲を聴きながら喚起される内的感覚をデッサンとして形にしておく。これが習慣となったことによって、音を他の感覚に変換して捉える力がついてきたように思う。とりわけ、「音色」と呼ばれるものが本当に視覚的な色として徐々に捉えられるようになってきている。もちろん、ここで言っている視覚的というのは肉眼で見られる色というよりも、心眼で捉えられるような色

のことを指す。私たちの心の眼にはいつも様々な色が映っているが、なかなか私たちはそれを知覚することはできない。なぜなら、そうした感覚が鈍化してしまっていたり、未開発であるからだ。心眼に映る豊かな色を知覚するためには、失われた感覚を取り戻すこと、あるいはそれを開発していくという姿勢が求められる。

今私が日々行っているデッサンはその一つの手段だろう。このデッサンを始めたのは、それを行う必然的な要求と促しがあったためであり、音色を知覚する感覚を回復させることや開発することは副産物のようなものであった。今はその副産物に気づくことができ、その効果を実感しているため、これからもデッサンの習慣を継続させていきたいと思う。

二曲の編集を終えた後に作曲する曲は、モーツァルトの曲に範を求めようと思う。モーツァルトが6歳の時に作った曲から参考にし始め、今ようやくモーツァルトが22歳の時に作った曲まで辿り着いた。この頃の曲になると、6歳の頃の曲と比べて随分と構造的な発展が見られる。だが一方で、6歳の頃から見られていたような曲の魂のようなものは普遍なのではないかと思う。人はこれを「モーツアルトらしさ」と呼ぶかもしれない。

そうしたモーツアルトらしさはやはり幼少期の頃の曲にすでに顕現されている。そのような光景を目の当たりにしてみると、やはり魂の性質自体は幼少期に形作られるものなのだということがわかる。

モーツァルトの曲に範を求めた後に少しばかり読書をし、過去の日記をいくつか編集していると昼食前のランニングの時間を迎えるだろう。今日の午前中はそのような形で過ごしていこうと思う。フローニンゲン：2018/7/11（水）07:11

2820. 論文との付き合いの継続

少しばかり私の誤解があり、提出した修士論文を再度手直しすることになった。先週の水曜日に二人の論文審査官に論文を送ったことをもってして論文の最終的な提出だと思っていたのだが、どうもそこから二人の簡単なレビューが入り、一度フィードバックコメントを受けて、それをもとに再度提出したものが最終版となるようだ。昨年もフローニンゲン大学に修士論文を提出したのだが、その時はこのようなプロセスではなかった。当時は論文アドバイザーのサスキア・クネン教授に一度最終ド

ラフトを提出し、それに対してフィードバックを受け、そこから最終版の論文を提出するという流れであった。

今回は二人の審査官が一度私の論文を読んだ後にそれに対してコメントが付され、そのフィードバックを元に再度論文を修正する必要が生まれた。これは査読付き論文を投稿する際のプロセスと似ている。査読付き論文を出版する際にも、必ず査読者からのフィードバックがあり、それらのコメントを反映させる形で論文を修正する必要がある。先週の水曜日に論文を提出したことをもって安堵していたが、もう少しだけ論文の執筆に付き合う必要があるようだ。

これについては肯定的に捉えるようにしている。確かに先週の水曜日をもってして論文の執筆から解放されることは、自分が望む探究活動と創造活動だけに従事する生活の開始を告げるものだった。しかし幸いにも、フィードバックコメントを眺めてみると、手直しの分量はそれほど多くなく、それらのコメントに対してどのような文章をどのように執筆していけばいいのかの道筋が見えている。また、先週提出した論文が最終版にならなかったことは、論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授の配慮も関係していただろう。

私はそれほど論文の評価を気にしていないのだが、ツショル教授はできるだけ高い評価を私が受けれるように配慮してくださっており、今回論文の修正を促されたのはそのことと関係しているだろう。

論文の修正に関するメールを昨夜受けた時、すでに論文の執筆から解放されたと思っていた私はあまりそれを良い知らせとは受取れなかった。だがよくよく考えてみると、ツショル教授の配慮がそこにあったり、また今回の論文はせっかく一年かけて執筆してきたものなのだから、できる限り良い論文を提出したいという思いになった。

ランニングから戻り、昼食を摂ってから論文の修正に少しずつ着手したいと思う。フィードバックコメントと照らし合わせながら、まずは修正が容易な箇所から着手していく。修正が完了する都度、対応するコメントにチェックマークを付していく。結局ほとんどのフィードバックはイントロダクションと先行研究のレビューに関するものだった。これらの箇所については大きく手を加え、分量と構成共により充実したものにしていきたいと思う。

© YOHEI KATO 2018

今日一日でどれだけ修正できるかはまだわからないが、希望としては大半の修正が終わることを期待している。仮に全ての修正が終わらなかったとしても、論文の再提出まで一週間ほどの時間をもらっているため、明日や明後日にまた修正を施していきたい。書籍や論文を含め、自己から生まれる全ての創造物は自分の子供のようであるから、この論文ともう少し付き合えることを有り難く思いたい。フローニンゲン:2018/7/11(水)07:32

No.1126: Birdsongs

Although it is still a weekday, Groningen is calm today, too. I can hear birdsongs from somewhere close to my house. Groningen, 08:54, Thursday, 8/16/2018

© YOHEI KATO 2018